



ooc tokyo office

設計・施工 / ooc 橋本卓磨

所在地 / 東京都中央区新富1丁目12-12-1F

designer, constructor / ooc inc. takuma hashimoto
location / 1-12-12-1F Shintomi Chuo-ku Tokyo

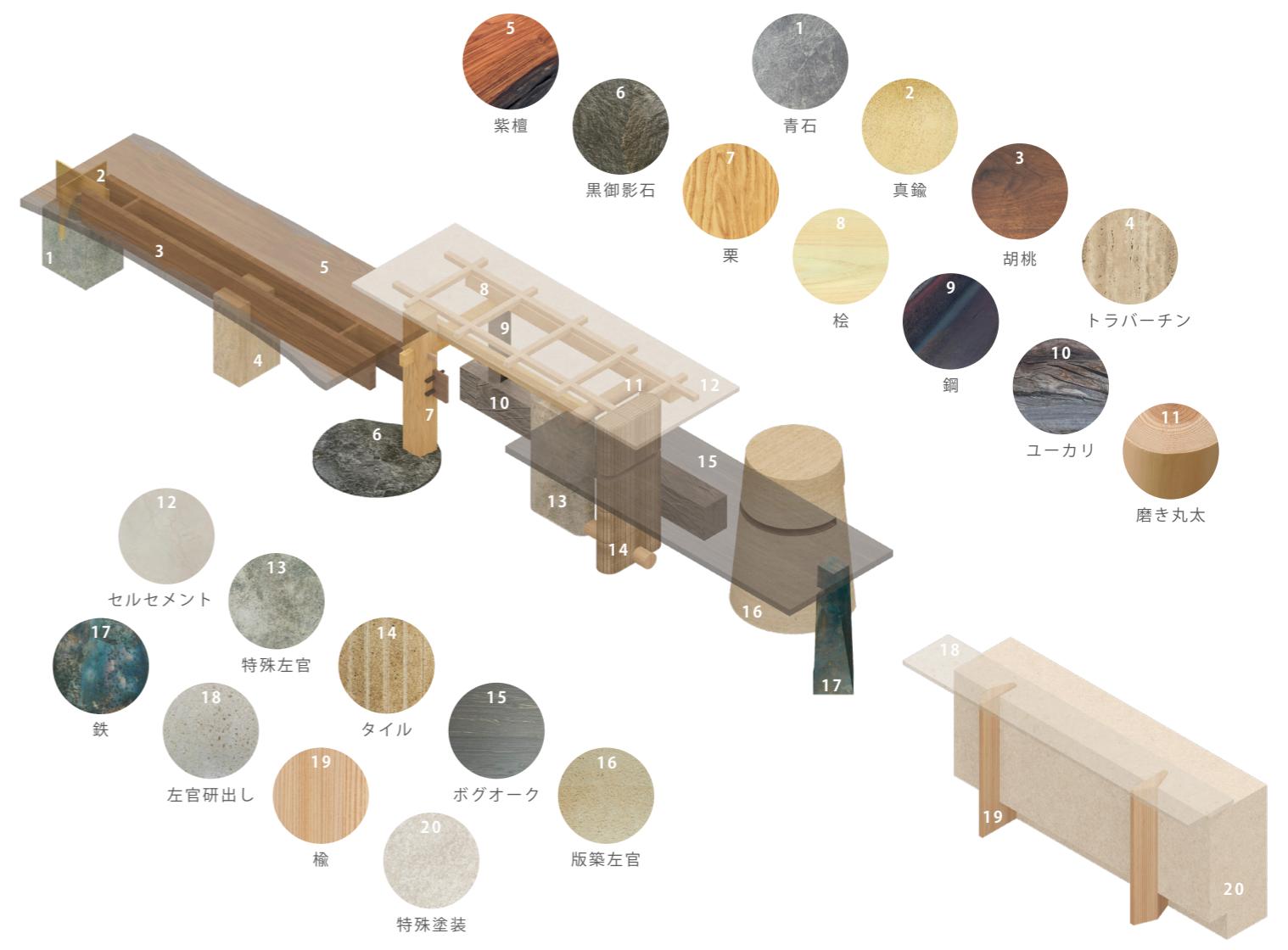


形象 / モニュメント

意味のないモノが潜在的にもっている「存在」としての美しさに興味がある。時間の経過に伴って機能的意義を失った構造体。人知れずそこに存在しているだけの石。制作した人の時間軸を超えて数百年かけて自然に還る人工物。意図が消失して、物体としての形象のみが存在している状態をモニュメントと定義して、その連續から成る什器を計画した。

空間の用途は、自社のオフィス兼カフェであり、街に開いた空間になることを意図した。ここでは様々なバックグラウンドを持つ方々が自由にクリエイションを拡張していく風景が生まれることを目指している。誰かが持ち込んだ概念や物が、文脈なくこの場所に併置される状態を受け入れることで、予期しなかった違和感や非日常がクリエイションの原点となることを期待している。

制作プロセスとしては、全体の形は検討せずに素材を集めながらその特性を理解しながら設計を進めた。様々なモノが脈絡なく併存するという空間のコンセプトを象徴するように、意味や文脈から検討せず素材と向き合うなかで形態を導き出し、什器として成り立たせるときに建築構造やディテールを再解釈して用いている。意味や背景に囚われず、マテリアルそのものに焦点を当てることで、物質がもつそれ自体の存在価値を模索している。



モニュメントの遍在 / マテリアルの実験

各モニュメントの形態と構成は、石と柱梁、土台と床組、鉄骨柱とコンクリートの壁柱など、建築の構造やディテールを抽出・再解釈し、様々な建築構造の抽象が混在するように計画した。木造伝統構法やRC造、鉄骨造などをモチーフとした構造形式が繋がることで、全長7mのテーブルとして成立している。各部分の形態生成のプロセスとしては、○△□という普遍的な幾何学の組合せを基本形に、素材と対話しながらそれらをデフォルメして構造化した。各部分は本来の建築物の構成要素としての文脈から切り離されてオブジェ化し、抽象的な形だけがそこに存在している。

素材は淡路島を中心に調達し、石、土、木など自然本来の姿のものから、鉄、タイル、セメントなど人の手が加えられたものまで、計20種類を選定した。制作には、木工、鉄工、石工、左官、塗装など総勢13人の淡路島の職人が協力してくれた。採石場や制作工場に足を運び、素材と職人の声を聞きながら約半年間に渡って制作を進めた。各素材の特性と、各職人の技術の統合によって生み出される「複雑な統一性」という秩序と無秩序が混在した形の連続的風景を表現している。これらの一連の什器は、淡路島の職人の美しい技術と素材の豊かさのもとで成り立っている。



大地に質量のある基礎を据えて、上部構造は軽やかに計画するのが、鉄骨架構の基本形である。台座に重量のある自然石を据えて、上部にアーチ構造をモチーフとした真鍮箔の鉄架構を載せた。大地に据わる石と軽やかな構造を形成できるという金属の特性から形態が生まれている。

日本の伝統構法と呼ばれる建築は自然石の基礎の上に、柱、大引、根太、貫、梁、桁など数多くの部材が組み上げられている。その各部材の納まりを抽出し再解釈した。黒御影石の上に栗の柱を建て、胡桃の貫材、桧の梁・根太で構成し、日本の伝統的な職人技術を表象している。

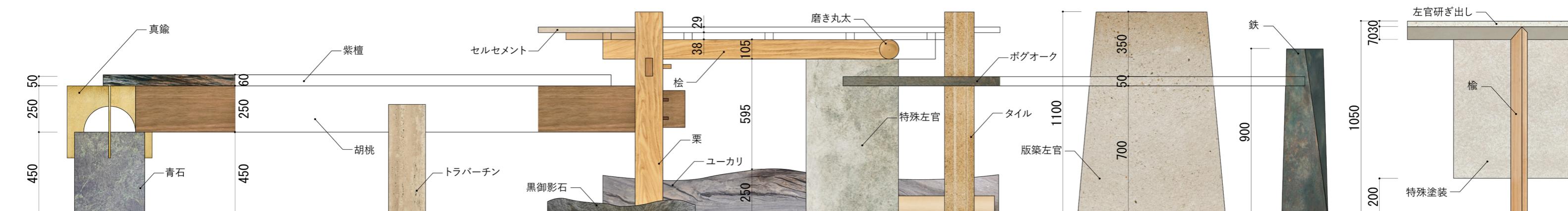
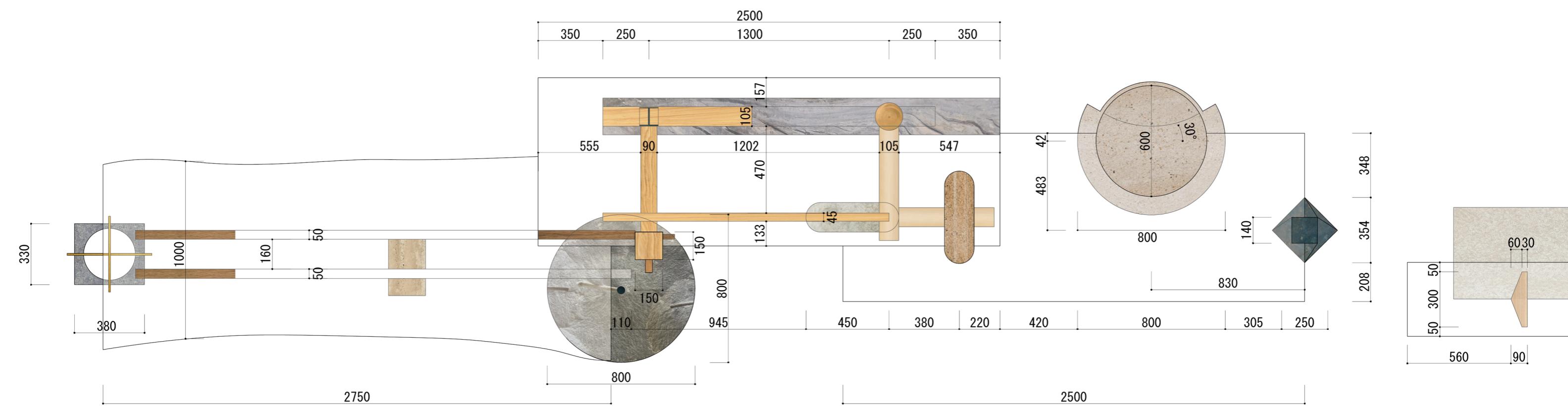
在来工法と呼ばれる構造は日本の伝統構法と西欧の壁式が融合した木造工法である。コンクリート基礎の上に土台を敷き、上部は耐力壁の面で建築物の剛性を高める。その形式を踏襲してモルタルとタイルから成る小判型の壁柱を建て、土台をモチーフとした丸太で接合した。

物体としての強度がある量塊的な建築を見ることがある。体積が大きい1つの素材がそれ自体で堅強な構造体を形成している。ある種の畏怖の念を抱く存在である。直径800mmのソリッドな円筒を形成し、全体を版築左官で仕上げることで、塊としての異質さを表現している。

シェル構造は薄く曲がった板を外殻として曲面によって荷重を分散する形式である。この面を曲げるという操作で形態を成立させる構造を応用し、鉄板を炉に入れて熱膨張する間に捻り曲げて強度を出した。2次曲面より、3次曲面の方が強度があるという建築構造力学を表象している。

線材で構成する日本建築に対して、壁という「面」で建築物を構造化する考えは西欧由来である。そのなかでも壁式RC造は壁と床という最低限の構成部材によって成立している。鉛直方向に楕の壁を建て、水平方向に左官研ぎ出しの天板を接続するという明快な構造で成立させている。



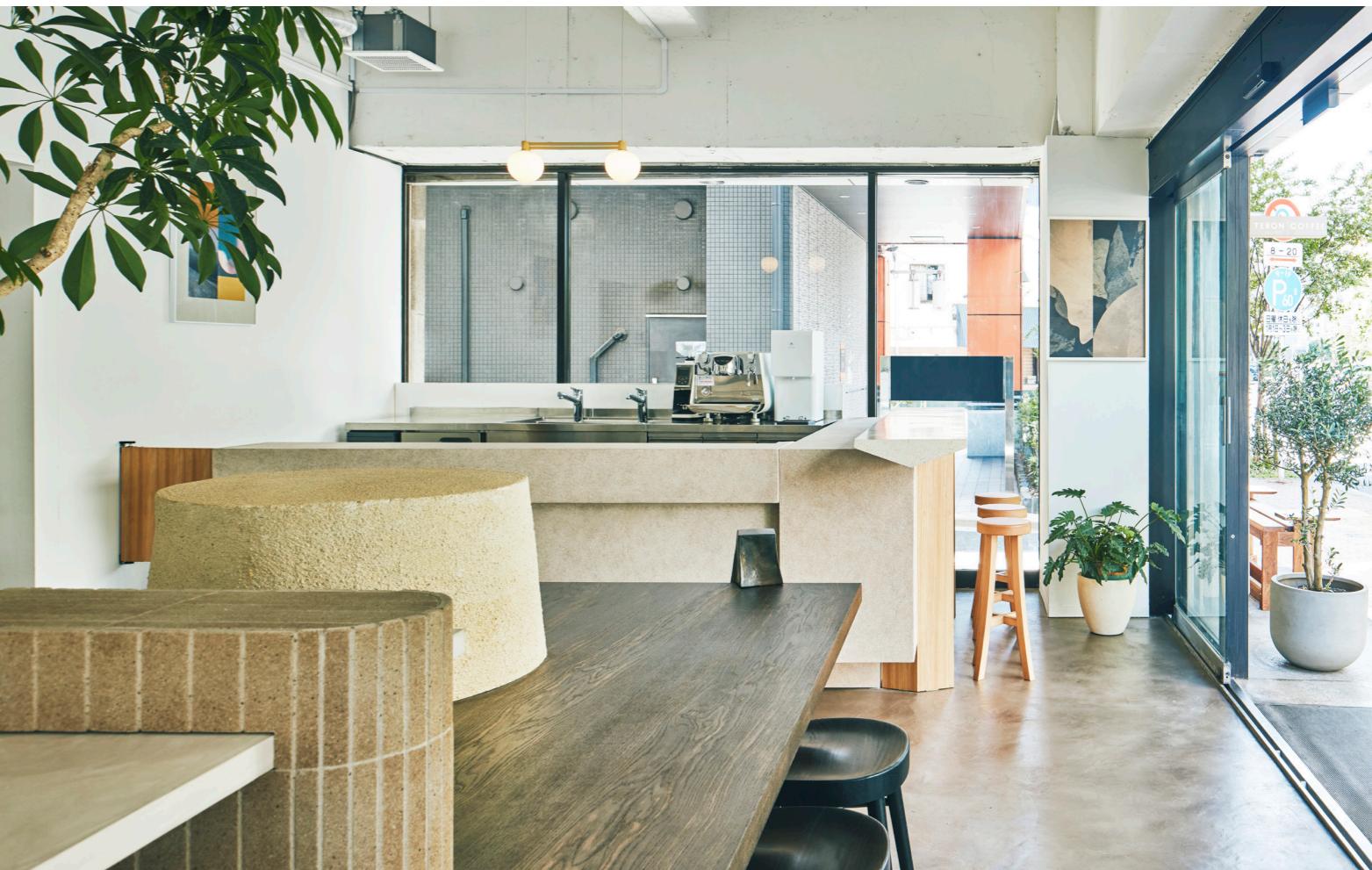


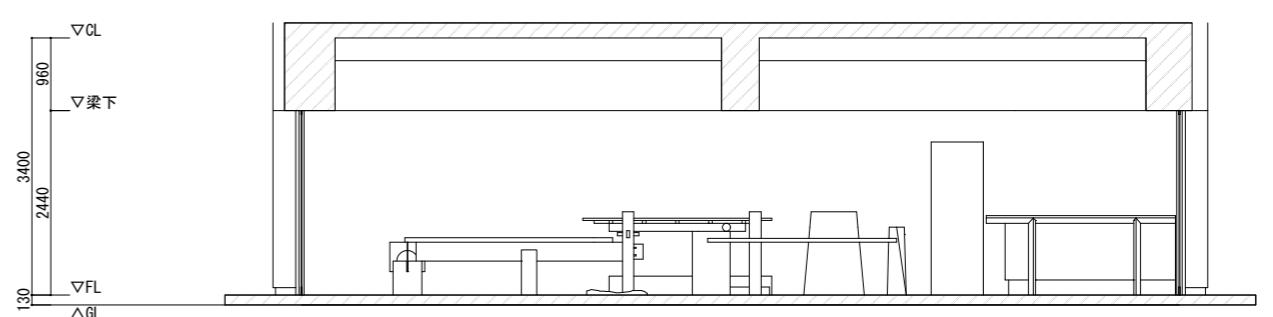
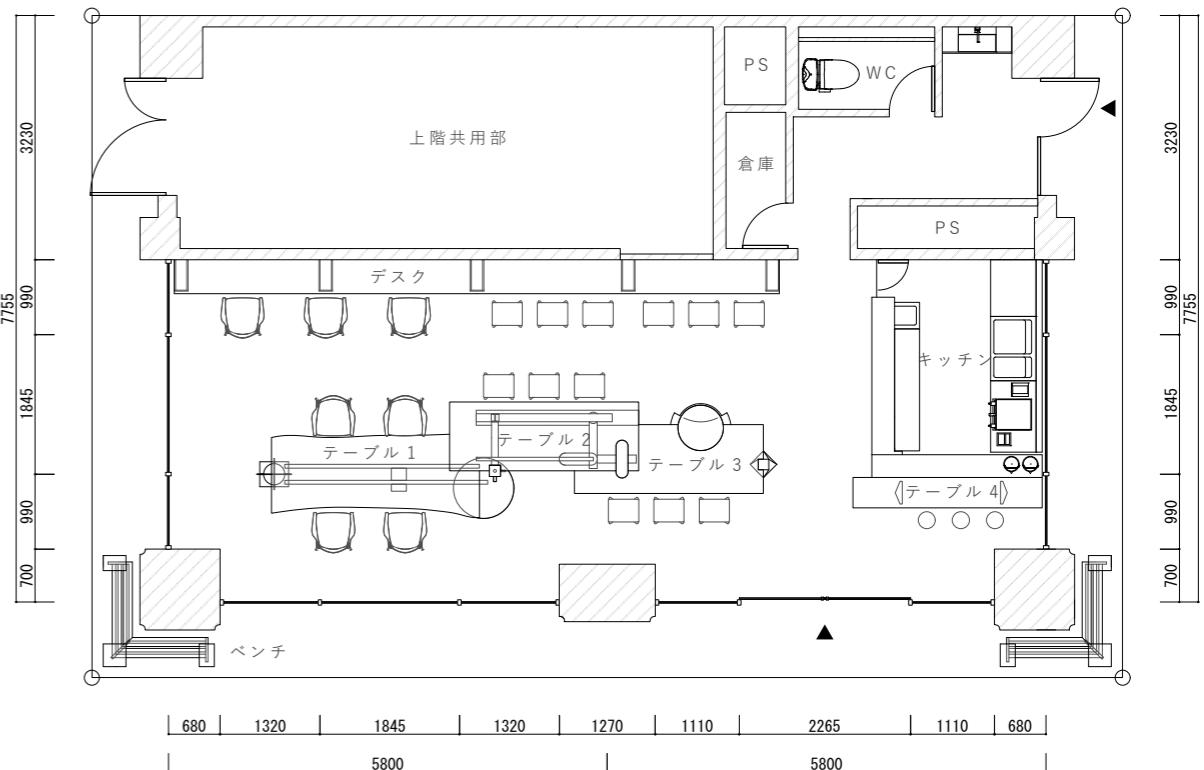


各モニュメントは3枚の天板によって統合されている。カフェ側の天板は、木の化石である珪化木の一種で、ボグオークと呼ばれる数百年前のオークの突板である。中央の天板は、セルセメントと呼ばれる土とセメントを研ぎ出した左官手法である。オフィス側の天板は、紫檀の無垢板であり、使われている全素材のなかで最も重量のある建材である。

建築的な構造やディテールを表象した各モニュメントは、天板によって統合されることで力の流れが全体に伝播し、ひと繋がりの複雑な構造体を形成している。異質な形態と素材の組合わせは構造化されることで全体性を帯びている。

この場所は、デザインオフィス o o c とカフェ TERON COFFEE で運営している。オフィスからカフェへとグラデーションナルに用途が拡がる風景がガラス越しに前の通りに開かれている。地域の方々、お客様、バリスタ、デザイナーなどの領域を超えた様々な方々と一緒にこの場所を作り上げていくことを目的としている。オフィスとカフェのひと繋がりの什器は、オブジェのような佇まいであり、ここに集まる個性豊かな人たちを象徴しているようである。「意味」を求めるすぎず、普段の生活の延長にあるような、何もなく普遍的だけど美しい風景がある、そんな場所となることを目指している。





概要

所在地：東京都中央区新富1丁目 12-12-1F
主要用途：オフィス・カフェ

設計

ooc 担当 / 橋本卓磨

施工

ooc 担当 / 橋本卓磨
木工：石川靖大, 大森宗典, 沖田大工
石工：和泉屋石材, 淡陶社
鉄工：長命佳孝, 丹波鉄工
左官：総合建築植田, 昇左官
塗装：前田達也
木材：淡路工舎, Atelier Kika, 有馬商店
電気：和田電業社
水道：島田広之
厨房：タニコー

規模

延床面積：64.05m²
階数：地上 1 階

寸法

天井高：3,400mm
主なスパン：5,650 × 4,525mm

構造

主体構造：鉄筋コンクリート造

工程（カフェ部分は 2025 年 1 月にオープン）

設計期間：2024 年 8 月～ 2024 年 10 月
施工期間：2024 年 11 月～ 2025 年 5 月

内部仕上げ

壁：石膏ボード t=12.5 の上, 水性ケンエース塗装
床：モルタル t=5 の上, アクアカラー塗装
天井：既存天井のまま

什器仕上げ

テーブル 1
天板：紫檀 t=60 の上, オイル塗装
脚：胡桃突板
テーブル 2
天板：セルセメント t=3
枠材：桧 3 角, 桧 10 角, 磨き丸太 105 Φ
脚：黒御影石Φ 800, 栗 150 角, ユーカリ原木
テーブル 3
天板：ボガオーク突板
脚：版築左官 t=10, 鉄板 t=4
テーブル 4
天板：左官研ぎ出し t=3
脚：楡突板, 特殊左官

デスク

天板：オーク突板の上, ウレタン塗装
脚：トラバーチン t=15

ベンチ

ウォルナット t=30 の上, オイル塗装

椅子

ウレタン塗装

竣工写真撮影

橋本越百